

85号 毛玉症の原因

毛球症は、不正咬合に次いでウサギに多い病気です。

ところが、犬や猫では胃内に異物があると吐いたり吐き出しそうにしたりするのに、ウサギは吐くことがほとんどないので、診断が難しいのです。

また、体の仕組みも、ウサギは胃から十二指腸への出口である幽門が小さく、伸び縮みも少ないことで、毛の排出をさせにくくしています。

ただ単純に胃に毛がたまるだけではなく、胃腸の働きが悪くなった結果、胃に毛の固まりができてくることが多いのです。それで最近は、毛球症は胃停止・胃停滞・胃の不動症候群などとも呼ばれています。

毛を飲み込むのは、換毛期で抜け毛が多くなったとき・出産前で毛を多くむしり取ったとき・ノミやツメダニなどの刺激で毛づくろいが過剰になったときです。そういうときに胃腸の働きが悪くなると、この病気にかかりやすくなります。

胃腸の働きが悪くなる原因には、高炭水化物（デンプンや糖質）で繊維の少ない食餌・暑さ・寒さ・環境の変化・病気などによるストレス・飼育小屋の狭さによる運動不足・飲み水を切らす・高齢などがあります。

若いウサギに比べ、年をとるほど毛球症は起こりやすいといわれています。

また、アンゴラウサギなどの長毛種は毛がからみやすいので、特に注意しなければいけません。

毛玉症の治療

内科的な治療

治療には、輸液を十分に行って脱水症状を改善し、胃腸の運動性を高める薬を使います。

胃にガスがたくさんたまっているときは、容態が急変することがありますので、鼻から胃までカテーテルを入れて、ガスを抜いたりすることもあります。

何も食べていないウサギでは、肝臓の細胞の中に脂肪滴が生じ、肝リピドーシス（肝脂肪症）になって、肝機能障害を起こします。流動食や輸液などによる栄養補給を行います。

外科的治療

内科的な治療で効果が出ないときには、外科的な手術を行います。胃を切開して、毛球を取り除きます。肝リピドーシスも、同時に起こしていることもあります。他の臓器にも異常が出ていないか、術後も観察が必要です。

毛玉症の予防

毛球症という名前がついていますが、毛球がたまる原因として、多くは胃腸の働きが悪くなるのが問題であるといわれています。

比較的によく見られる病気ですが、ウサギは症状をつかみにくい動物なので、診断が他の動物に比べると難しく、また、急変することもあります。それだけに予防がとても大切なのです。

毎日必ずブラッシングをして、抜け毛を取ります。特に抜け毛の多い季節は、まめにしましょう。

高炭水化物で低繊維の食餌は、胃腸の機能が低下しやすいので、干し草のチモシーなど、繊維の多い食餌を多くします。そうすることで胃腸の働きが活発になり、胃から毛の排泄を促します。小さい頃から干し草大好きなウサギにしましょう。

繊維の多いものは、チモシー・セイヨウタンポポ・オオバコ・大根の葉・セロリ・ゴボウ・キャベツ・ニンジン・リンゴの皮などです。

たくさん遊んだり、運動させたりしましょう。退屈していると毛をなめる時間が多くなるからです。

放っておくと危険な理由

毛球症では、胃腸の運動性が低くなるため食欲不振になり、便の量も減って、小さな便になってしまいます。元気もなくなります。全く食べない状態が続くと、2~3日で肝臓の細胞の中に脂肪が沈着する、肝リピドーシスという病気になり、余計体調が悪くなってしまいます。

胃の中でガスや液体がたくさんたまりやすくなることもあり、胃がパンパンに張ってしまうとショック状態になり、急変することがあります。

まれに毛球が小さな塊になって腸へ流れていき、腸で閉塞を起こしてしまいます。脱水症状になったり、血液の循環不全、いわゆるショック状態になったりして、有害な腸内細菌の増加などにより、死ぬこともあります。

そうってからでは大変なので、毛球症の可能性があるかないか、動物病院へ早めに連れて行って調べてもらいましょう。

病院では、過去の病歴・現在の症状・食餌の内容や状態などから推測していきます。

胃にガスや液体がたまって大きくなっていないか、固く張っていないかなど、触診して

調べます。

X線検査・バリウム造影検査・超音波検査などが診断の助けになることがありますが、ときには検査を兼ねて、手術が必要になることもあります。

コラム 数字の背景

私がアニファでウサギのことを書き始めた頃から、本当にウサギの来院頭数が増えました。世の中の流れがちょっと変わったのかしら!? と思うくらい。

その頃はまだ、ウサギの専門書もデータも少なく、ウサギ好きな先生たちが集まって、エキゾチックペット研究会が立ち上げられたのでした。

最近では学会でも、ちゃんとエキゾチックの会場があって、大入満員の人気です。そこで今回は、友だちのリクエストに応じて、「データ付きコラム」にしました。

大阪の学会で、「やっぱりねー」と思った発表があったのです。

一つは、「ウサギの歯牙疾患の最悪状況と臨床的傾向」。……都内のK動物病院に1年4ヵ月の間に来院した267頭のウサギ。そのうち37%が歯の病気で、メスよりオスのほうが1.9倍高かったそうです。歯の治療が必要になったのは切歯で、約2歳5ヵ月。臼歯平均より約1年早い傾向が見られたそうです。病気の進行を遅らせるためには、1ヵ月おきの歯科処置や、高繊維食への食餌改善が有効との報告でした。

二つ目は、ウサギ専門のS先生のデータで、食餌のアンケートをとったところ、臼歯過長症のウサギと、過長の治療を受けていないウサギとの間で、干し草の摂取量に大きな差があった、という報告。小さい頃から十分干し草を与えることが過長の予防に有効というわけ。

さて、そこで私たちの病院でもデータを出してみました。歯の治療でちょこちょこ来るウサギ……ラブちゃん、プーちゃん、ホシちゃん、まさるくん……。よく来る21匹のうち、メスはハナちゃんとミミちゃんの2匹だけ。つまり、95%がオスでした。そしてホシちゃん以外は干し草嫌いなウサギばかりでした。

日頃から、「歯を削る子って、オスが多い気がしない?」と、そういう傾向に気付いてはいたものの、こうしてデータを出してみると、証拠を突き止めたようで、おもしろいものです。

じゃあウサギは、「メスを買うほうが経済的ってわけね」と、経営コンサルタントのNさん。「でも私なんか男で苦労してるけど、周りが女ばかりっていうのもつまんないから、わかってはいても、相性とか好き嫌いってあるしね」とMさん。

オスもメスも小さい頃から干し草たっぷりの一に干し草、二に干し草。これがウサギのポイントかもしれません。

